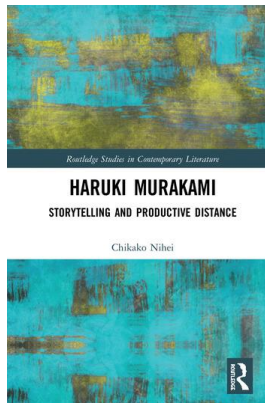


【自著紹介】 Chikako Nihei, *Haruki Murakami: Storytelling and Productive Distance*

(Routledge 出版 2019 年 6 月)



本書は、筆者がシドニー大学日本学科在籍中に取り組んだ博士論文が基になっており、「鼠三部作」『ノルウェイの森』『海辺のカフカ』『1Q84』を中心に扱っている。主な目的は、①小説において「他者」との接触によって生じる「自己」への影響や働きが、個人レベルと文化レベルでどう類似するかを考察する、②文化的・言語的境の越境に意識的な村上自身の文化的他者との関わり方の変遷を追う、③村上が主張する「物語の力」の意味を分析することである。小説家の洋行とその作品への影響は、明治以降の日本文学を特徴付けているが、村上を差別化するものは、村上の移動の目的が「大きな（西洋という）他者」との対峙ではなく、国境を越えること自体にあるという点であると筆者は考える。自己の文化から距離を置き、異文化に身を置くことで、自らが抱えるある種の常識を異化し、自分や社会への視点を複数化させることが目的であり、これは小説の登場人物たちが作中に経験する身体的で比喩的な「旅」を通して実行される。このテーマは、村上の言語使用にも見られることにも注目し、村上の小説や翻訳活動を通しての言語的実験についても触れている。村上の文章は翻訳調で日本語らしくないと形容されがちであるが、ジェイ・ルービンを始め村上作品の翻訳者からの意見を考慮すると、村上は外国語に訳しにくい日本語の特徴的要素をあえて使っており、言い換えれば非日本語的と思われる村上の日本語は、翻訳の過程を得ることでの「日本語」性が際立つことがわかる。このような村上の試みはグローバル化によって懸念される文化の均質化への抵抗として、新しい文学の模索とも考えられる。このようにある種の境界を越える「旅」の行為が視点の複数化を促す様子を「距離の生産性」と題し、タイトルに置いた。

この「距離の生産性」に注目する意義は、村上が主張する「物語の力」の内容を明らかにする試みにもある。距離を利用した視点の複数化は、「大きな物語」が失われたとされる冷戦終結後の社会において、価値基準形成の糧になりうるのではないかと、また村上の「僕」たちが事件に巻き込まれた際にしばし見せる冷静さはそこにあるのではないかと、筆者は考えた。さらにこの「物語の力」こそ、麻原彰晃が信者に与えた「閉鎖的な物語」に対抗できるものとして村上が提示しようとしたものなのではないかという議論につなげている。

【仁平 千香子（村上春樹、文学における食表象、移民文学）】